

1 各教科の学力・学習状況調査の考察について

○国語科

「読むこと」「書くこと」については、全体的に正答率が高い傾向が見られる。特に、文章を書く際に、内容の中心が明確になるように意識して文章を構成したり、展開を工夫したりする力を発揮できる生徒が多い。また、物語文を読む場面では、登場人物の性格や背景、行動の理由などを的確に捉える問題を得意としていることが分かる。こうした点から、文章のまとまりを考えながら整理して理解したり、適切に表現したりすることに強みをもっていると言える。

一方で、「話すこと・聞くこと」については課題が見られる。具体的には、相手の表情や反応を踏まえながら、自分の考えを分かりやすく相手に伝えるために、話の筋道を立てて構成することが苦手である。論理の展開や表現の仕方に十分な工夫が見られず、自信をもって話すことに消極的な生徒もおり、改善が必要である。

○数学科

「データの活用」に関しては、比較的正答率が高く、統計資料やグラフなどの数的情報を読み取り、活用する力が備わっている生徒が多い。

しかし、全体として見るとまだ課題が残っている。特に「図形」の領域では苦手とする生徒が多く見られ、多角形の外角の意味を正確に理解できなかったり、図形の性質をもとに条件を変えて考えを発展させることに難しさを感じていたりする。また、与えられた証明を評価して改善するような発展的な課題に対しては、論理的に筋道を立てて考える力が不足しており、正答率も低い。こうした点から、図形的な見方や考え方を豊かにし、条件を柔軟にとらえて解法を工夫する力を育てていくことが今後の課題である。

○理科

「エネルギー」については、正答率が高い傾向にある。特に、電流や電圧、抵抗といった電気分野の基本的な知識や熱量の計算など技能的な側面を正しく活用できる生徒が多い。また、理科に関する資料やグラフを根拠にして、その情報の信頼性を的確に判断することも得意としており、学習の定着が図られていることがうかがえる。

一方で、「粒子」に関しては苦手意識をもつ生徒が目立ち、正答率は低かった。例えば、科学的な探究活動の中で新たに生じた疑問をこれまでの知識と結びつけて考えたり、身近な生活の事象と関連づけて説明したりすることができていない。また、実験結果と既存の知識を対応させて理解することにも難しさを感じており、思考の広がりや深まりが不足している。したがって、粒子に関する概念を実験や観察と有機的に関連づけて理解できるようにすることが、大きな課題である。

2 生徒質問調査の考察について

○ 朝食をとらずに登校する生徒や、就寝・起床時刻が不規則で生活リズムが乱れている生徒が多いことが明らかになった。こうした生活習慣の乱れは、学習に必要な集中力や体調の安定に影響を及ぼし、結果として授業への意欲や学習に取り組む姿勢の低下につながっていると考えられる。特に、十分な睡眠が確保されないことで授業中に眠気を感じたり、朝食を欠食することでエネルギー不足になったりすることが、各教科に対する学習意欲を下げる一因となっている傾向が見受けられる。

3 今後の本校の取組について

- 授業の中で学ぶ知識や技能を単なる知識習得にとどめるのではなく、日常生活や社会での実際の場面と結びつけて示すことで、学習の意味や必要性を実感できるようにする。また、課題解決の過程を重視し、筋道を立てて考えを進める活動を取り入れることで、論理的思考力を一層育成できるように授業改善を図る。
- 学校での授業だけでなく、家庭学習においても ICT 機器を積極的に活用するようにする。タブレット端末や教育用アプリを活かして調べ学習や発表活動を行い、理解を深めるとともに、繰り返し学習や振り返り学習を効果的に行えるようにすることで、学習効率の向上を目指す。
- 学力向上の基盤には、規則正しい生活習慣の確立が欠かせない。そのため、生徒に対して朝食をしっかりと摂取することや、十分な睡眠を確保することの大切さを繰り返し伝え、家庭と連携しながら生活リズムを整えるように働きかけていく。健全な生活習慣の定着を通じて、集中して学習に取り組む態度を育てることを目指す。